

Facebook を利用した研究室単位の情報発信

有井 康博

(要旨) 昨今、大学では研究・教育に関する様々な情報発信が求められている。本学においては、大学組織としての情報発信として、従来の紙ベース、ホームページ (HP)、メディアを利用した発信に加え、Facebook や twitter などのソーシャルネットワーキングサービス (SNS) の利用が実施されている。一方で、研究室単位による積極的な情報発信はあまり行われていない。低調な活動の要因として、HP 管理の煩わしさ、立ち上げの難しさ、SNS による情報発信のリスクなどが挙げられるだろう。研究室は大学における組織の最小単位であり、最小単位による情報発信は研究・教育活動に興味を持つ対象者に有意義な情報となる。ここでは、著者の経験を紹介することで、普及への障壁を低くすると共に活動のメリットを感じていただき、研究室単位による情報発信が積極的に行われるきっかけを提供したい。

キーワード : 研究室単位, 情報発信, ソーシャルネットワーキングサービス, ホームページ, Facebook

1 はじめに

平成 23 年度より実施されている、文部科学省「大学における教育情報活用支援と公表の促進に関する協力者会議」の報告等「大学における教育情報の活用・好評に関する中間まとめ」にあるように、全国的に大学組織としての情報発信は著しく活発化している¹⁾。本学も潮流に乗り、従来の紙ベースの情報発信に加えて、2015 年には大学ホームページ (HP) のリニューアルを行い、大学組織としてデジタルな情報発信も活発に行っている。また、様々な活動の報告、卒業生、在校生、高校生、保護者に向けた情報発信を、ソーシャルネットワーキングサービス (SNS) も用いて、実施している。一方で、大学 HP の教員紹介を見てみると、教員個人 (研究室単位) の研究・活動における情報発信には、あまり積極的な活動を見ることができなかった。この活動の低調さの要因は、教育活動、研究活動、大学運営における多忙さに加え、HP 管理の煩わしさ、立ち上げの難しさ、SNS による情報発信のリスクなどが挙げられるだろう。しかしながら、文部科学省科学研究補助金の申請書や結果報告書において、研究結果の報告方法を記述する欄があるように、教員個人の研究報告を発信することが求められる時代となっている。また、他大学および本学の教員が HP や SNS を教育・研究支援ツールとして用いるという、新しい利用も始まっている。

本稿では、本学のデジタルな情報発信の現状を報告し、より多くの教員が HP や SNS を教育・研究支援ツールとして用いることを促進できるように、著者の経験・ノウハウを紹介する。著者の活動は、HP の利用が 12 年、SNS の利用が 4 年であり、まだまだ未熟ではあ

るが、同様な活動が増えることで、より効果的な活動が生まれてくると期待している。

2 本学の利用状況

著者の活動を紹介する前に、本学における研究室単位の HP の利用について調べてみた (図 1)。大学学部、短期大学部に所属する専任教員で講師、准教授、教授という研究室運営をする立場の職位にある教員について大学 HP の教員紹介にある HP というボタンの数を数えたところ、図 1 に示すように、93.0%の教員が HP を開設していないことが明らかとなった。また、ボタンはあるが休止状態の HP が 3.8%、稼働中の HP は 3.2%であった。ただし、学科専用ページにある教員紹介は HP を開設していないに入れている。次に、稼働中の研究室単位の HP について、その中身を閲覧した

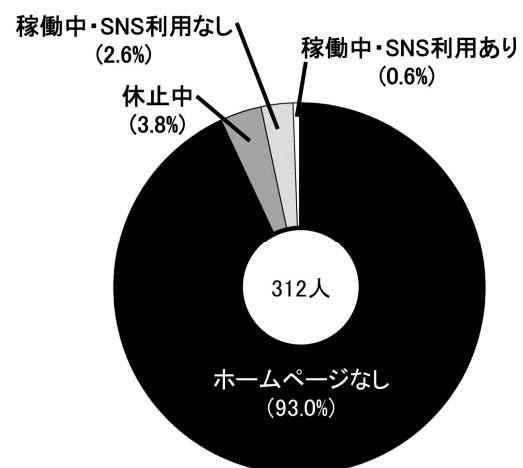


図 1 本学における研究室単位の HP 利用率

対象は本学専任教員のうち、講師、准教授、教授の 312 名。

ところ、SNS を利用している HP は僅かに 2 件 (0.6%) であった (図 1)。

3 著者の HP の運営の歴史

著者が HP の運営を始めたのは、前任校において助手をしていた 2004 年 4 月である。当時、所属していた研究室の上司から「これからは情報発信が大切だから、研究室 HP の立ち上げと運営をお願いします」と命じられたことがきっかけである (図 2A)。当時は基本的な知識も持たず、テクニカルな問題が山積みな状態で、非常に苦勞をした記憶がある。当時用いていたソフトウェアは Dreamweaver (Adobe 社) だが、本格的なソフトウェアであるため、初心者で素人の著者には使いこなせなかった。しかし、およそ 12 年が経ち、ホームページを立ち上げ、運営管理すること自体は随分と易しくなったと感じている。

次に HP を立ち上げたのは本学に着任し、研究室を運営し始めた 2009 年 4 月である (図 2B)。ただし、着任時にホームページの開設について学科長にご相談しあげたところ、しばらく待つようにご忠告をいただいたため、ゆっくりと準備を行い、2009 年 11 月に公開となった。ペンディングの理由は定かではないが、個人研究室の HP の開設は色々なリスクを伴う恐れが予想されることが理由だったのでは、と推察している。様子見が功を奏してか、今日に至るまで大きなトラブルはなく運営できているので、ご忠告には感謝しているが、こういう風潮が遅延をもたらす一因であるとも考えている。さて、HP の作成には iWeb (Apple 社) を用いた。iWeb は Macintosh のパソコンを購入すると付属している無料ソフトウェアで、使い勝手もよい一方で、html ファイルのテキストエンコーディングの保

存形式が Unicode (UTF-8) であり、本学のサーバーの設定 (Shift JIS) と合わず、更新する度に Dreamweaver でエンコードを変換する作業が必要であった。この作業を約 4 年続けたが、やはり負担が大きすぎて、更新することにストレスを感じ始め、新しい方法を模索し始めた。情報発信のアクセシビリティは、受信側のみならず、発信側にも重要である。

著者自身の上述の経験を通じて、継続的な更新を必要とする HP の運営には、更新に手間がかからないことが最優先事項であることが浮き彫りになってきた。そこで、2014 年より無料ウェブサイトビルダーの一つである、WIX (ウィックドットコム) を利用している。本ビルダーは、ブログ形式で記事を更新できる、作成が簡易である、SNS と連動できる、デザイン性が良い、スマートフォン対応のページも簡単に作成できる、ネット環境さえあれば更新に場所を選ばない、など、様々な利点を有す。他にも Jimdo や Academic Café などの無料ウェブサイトビルダーがある。それぞれに特長的であるので、自分の仕様にあったものを選択することをお勧めする。

著者の HP 運営で、無料ウェブサイトビルダーを使用し始めてから、大きく変わったことがある。情報発信に SNS を取り入れることが可能になり、情報発信量が増え、情報発信対象も広がったことである。具体的には HP のトップページにブログ形式と SNS 形式の情報発信を設けて、その情報発信内容を分けることを試みている。ブログ形式には研究活動を主としたコンテンツを流し、SNS 形式には研究活動以外にも研究室の日常を流すことしている。この取り組みは、従来の研究室 HP を開設する目的とは異なる効果を生み出していると分析している。



図 2 著者の作成・運営した HP たち

左から前任校で所属していた研究室の HP (A)、本学に来て立ち上げた研究室の HP (B)、2014 年にリニューアルした研究室 HP (C)。

4 SNSの利用・効果・注意点

著者が使用している WIX と連動できる SNS は、Facebook, twitter, Instagram, LinkedIn など、様々である。著者は HP とこれらの SNS を連動させ、それぞれ目的別に使い分けている。ご存知の方も多いであろうが、Facebook は文字数制限がなく、写真や映像も提供できるという特長、twitter は文字制限があるが軽くつぶやけるという特長、Instagram は写真や映像に特化しているという特長、LinkedIn はビジネスレベルの使用が多く対象がグローバルであるという特長がある。その中で HP のトップページで利用しているのは、Facebook である。

東京情報大学教員の河野義弘氏は、大学教員が SNS を活用する 5 つのメリットを上げている²⁾。

- ① 研究成果を一般の方にも知ってもらえる
- ② 世間からのフィードバックが得られる
- ③ 自分の考えがブラッシュアップできる
- ④ 学生に考えを伝えることができる
- ⑤ 卒業した学生とのコネクションを維持できる

これらのメリットについて著者も同じことを感じている。①については一般の方、異分野の研究者、本学の学生、他大学の学生に研究成果や研究内容を伝える効果があるだろう。②については、マスコミ（NHK や新聞折り込み紙）からの取材申し込み、利用者のコメントがあった。③については日常的に書く習慣を設けることで、研究室の運営方法、学生指導の在り方、新しい研究テーマの方向性などを考える機会が増えた。④については、畏まって言うには気恥ずかしいこともツイートすることで対象を絞ることなく伝えることができる。⑤については、こちらから申請を促さないように心がけているが、卒業生から申請があった場合は必ず受けることにしており、そうすることで卒業生の協力を仰ぎたい時に打診しやすいというメリットも感じている。5 つのメリットに加えて、研究室の見える化を実施することで在校生が卒業研究で研究室を選択する際により多くの情報が得られること、研究室に所属する学生たちに帰属意識が高まること、卒業生が自分の携わった研究の現状を知ることができること、卒業生が気軽に連絡を取れること、教員との壁が下がること、などのメリットも感じている。

さて、物事にはメリットばかりではなく、デメリットも存在する。SNS の使用に抵抗感のある人の多くが、デメリットを恐れてだろう。実際、教育現場で SNS を使用する際に、学生が教員に友人登録されることに不安を覚えるという研究結果もある³⁾。この不安を解消す

るために、著者は個人の Facebook ではなく、個人ページに研究室ページをぶら下げる形で利用している。このページの閲覧には登録の必要がなく、学生たちも教員も互いにプライベートを知られるリスクを下げるができる。また、所謂炎上という現象については、発信側が気をつけることで十分に防ぐことができると考えている。差別的な発言、政治や宗教に関する発言、成績に関係する内容について一部の学生に有利に働くような情報発信を避けることに気をつける必要はあるだろう。講義内容に関する発信は教育的効果が大きいので利用したいが、受講者が平等に閲覧できるシステム上で行う方が妥当かもしれない。例えば、本学では μ Cam や MUSES である。しかし、現状ではいずれも利便性に欠け、本目的で使用するのは難しい。この問題に関しては、改善すべく活動中であるが、本質的ではない問題が大きく遅々として進まない。

5 Facebook による情報発信の分析

著者が研究室の情報発信に最も頻繁に利用している SNS は Facebook である。Facebook には閲覧者数が記事ごとに算出される機能、閲覧者の種別を分析してくれる機能などが用意されている。そこで、著者の研究室 Facebook ページの分析を試みた。

著者の更新した記事で最も閲覧が多かった記事は「大学院生が国際学会に旅立つ様子」で、2,000 件以上の閲覧があった。更新する記事は、論文の出版から誕生日会の様子まで様々であるが、遊びの情報を載せた時（現状で常時 400 件くらい）よりも、実験、学会発表、卒論発表の様子など、アカデミックに学生が活躍する様子を掲載した時に閲覧数が伸びる（800 件くらい）ことから分かるように、閲覧者たちは分かりやすく親しみやすいアカデミックな情報を欲していると分析している。また、閲覧者の近い未来を思い描く、昔を懐かしむ、などのイメージ作りに貢献できていると推察している。閲覧者の種別を見ると、多くは大学生の年代であるが、保護者の年代、中高生の年代からの閲覧も僅かにある（図 3）。この分析は Facebook アカウントを持っている者のみをカウントしていることを考えると、分析上は少数の年代も実数的にはより多くが見てくれていると期待している。これらの情報から、多くの大学生が研究室の活動を知りたいと願っていることが推察される。また、分析日（2015 年 12 月 28 日）より過去 28 日間の閲覧者は約 2300 名（同じユーザーが繰り返し別の記事を見たとしても 1 名とカウントされる）であり、Facebook の機能を用いて閲覧件数（閲覧者延べ人数）を算出すると、2015 年 11 月 30 日から 12 月 28 日の 28 日間で 60,634 件の閲覧があった

過去28日間に投稿が配信された人数です。

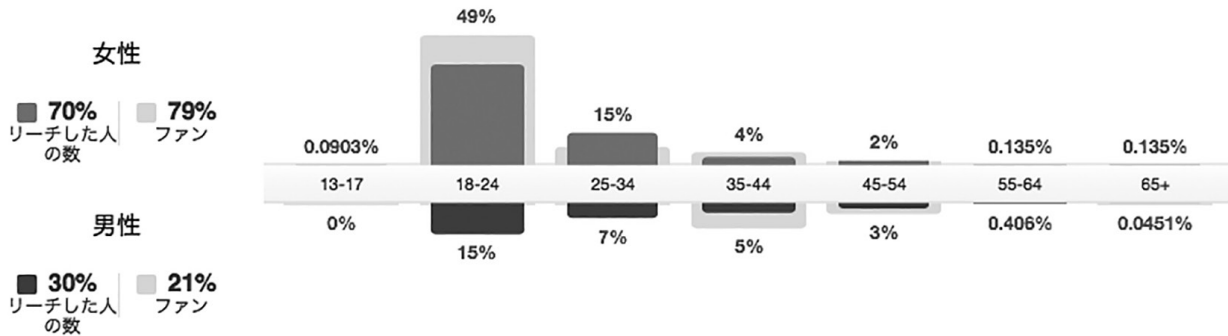


図3 著者が立ち上げている研究室 Facebook の閲覧者の年代別分類

2015年12月28日現在の分析で、分析日より過去28日間に訪れたFacebookのアカウントを有する人たちの年代別分類である。

ことが分かった。Facebookの情報発信力の大きさがよく分かる。前述の28日間の閲覧者の国内都道府県別分布を調べると、大阪(638件)、兵庫(399件)、東京(391件)の順で多く、奈良、和歌山、京都、愛知、神奈川、福岡、富山、岡山の順に続く。このことから、在校生、卒業生、その保護者が閲覧してくれていることが伺える。また、国別閲覧数を調べると、日本がダントツであるのは述べるまでもないが、アメリカ合衆国、オーストラリア、韓国、バングラディッシュ、フランス、タンザニア、ブラジル、イタリア、タイ、シンガポールから閲覧が計41件あることが分かった。情報発信の言語が日本語であるにも関わらず、海外からの閲覧があるのは有難く、情報発信の方法として英語と日本語の併記を考慮することが必要だという課題も見えてきた。

6 まとめ

著者はHPとFacebookを組み合わせた情報発信はとても強力なツールであると感じている。情報発信にはリスクが付き物であり、その効果が大きければ大きいほど、リスクも高くなる。しかし、ある程度の自己制御によるリスクヘッジは可能であろう。より多くの教員が情報発信を積極的に行うことは、在校生、卒業生、入学希望者、保護者にとっても大きなメリットをもたらす。また、教員自身にとっても活動の幅を広げるチャンスにつながる。さらに、学院にとっても研究室単位によるスモールな単位での情報発信は更なる発展に欠かせないと思う。一人でも多くの教員が情報発信に力を注いでいただけることを願う。

7 参考文献リスト

- (1) 文部科学省 大学における教育情報活用支援と公表の促進に関する協力者会議 大学における教育情報の活用・公表に関する中間まとめ.
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/ko utou/44/toushin/1310842.htm
- (2) 河野義広, 大学教員がソーシャルメディアを活用する5つのメリット. マーケター通信
http://blog.marketing.itmedia.co.jp/yoshi_kawano/entry/131.html
- (3) チェ スッキョン, 大学生の授業支援ツールとしてのフェイスブックの使用状況と認識調査. International Christian University Educational Studies, 56, 141-146.